

---

# モテない男が手にした物

K.KAIL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モテない男が手にした物

### 【Nコード】

N9207D

### 【作者名】

K・KAIL

### 【あらすじ】

何をしてもダメな主人公・綱渡慶雅。そんな彼は今日も紹介してもらった女の子にフラれ、トボトボと家路についていた。いつもの公園で黄昏ていると・・・

## 1話：デブとジャイブ

僕の名前は綱渡慶雅。つなわたりよしまさツナって呼ばれています。

彼女いない歴は26年。今の年齢も26歳。つまり全く異性にモテた事がないんです。

もともと僕は体重が100キロ近くあるし服なんか気にした事もないしだらしないし……。

高校もダブっちゃったので同学年のみんなはまだ25歳。そんな知り合いの中には僕からしたら素晴らしすぎるほどモテる男がいるんだ。

神谷練。かみやれんこいつはうらやましい……。いや！許せない程女の子をはべらかし、彼女がいても2番や3番がいたりと言ったスーパープレイボーイなんです。

そんな僕は毎回、練から女の子を紹介されますが……。もちろんうまくいかず今日も落ち込んで帰るところってわけ。

僕はいつも凹むとこの世田谷公園のブランコに揺られながらコンビで買ったチューハイを片手に空を見上げるんだ。

いつものとおりブランコに腰掛けようとするとそこには猫が先に座っていた。どかすのも悪いと思い隣のブランコに座ると……

「おい！このデブ！やけにシケたツラしてやがるな！！」

……。周りを見渡しても僕以外誰もいない。

『え・・・??だ、だれ??』

「おまえの隣に座ってんだろ！腹が邪魔で横も見えねえのかよっ  
！」

『横って・・・。え??』

そこに座って僕を見ていたのはさっきの猫。

『ええええ！ね、猫が喋った・・・。』

「うつるせえな！オレが喋っちゃ悪いのかよ！いいじゃねえか！  
おい！デブ！名前は？」

『え・・・ツナだよ。き・・・君は?』

「オレはジャイブってんだ！でよお、どうした？浮かない顔してよ  
？」

『そりゃあ浮かないよ・・・実はかくしかじか・・・』

不自然な状況に混乱しながらも僕は事情をジャイブに話したんだ。

「かあゝゝ！！バツかなあ、おめえは。よく考えてみるよ。オレ  
から見たらその練ってヤツもオマエも同じ人間だろう？クヨクヨす  
んない！」

『でも僕は練みたいにかッコよくもないし・・・デブとかブタとか  
言われるし・・・。』

僕は思い出してどんどん凹んできてしまったんだ。

「よし！じゃあオレがオマエの根性を叩き直してやる！そのかわりオレに毎日メシを食わせる！いいなっ？」

ジャイブはブランコから飛び降りると僕の背中に乗った。

『ええええ．．．こ、困るよ．．．』

「お前働いてんだろ？オレみたいなノラ猫さえ飼えないのに女がモノにできるのか！？」

『．．．．．』

こうして僕は返す言葉もなく喋るノラ猫のジャイブを連れて下宿先の新聞屋に帰ることになった。

このジャイブとの生活がモテない男日本代表クラスの僕を大きく変える事になるなんてこの時の僕は知る由もなかったんだ。

## 1話：デブとジャイブ（後書き）

人間は中身が大事なんです。そんなことがテーマになっています。

## 2話：僕と練と由希さんと（前書き）

ひよんなことからノラ猫のジャイブと生活することになってしまった、ツナ。そんなツナにさっそくとんでもなく悲しい事件が舞い込んできた・・・。

## 2話：僕と練と由希さんと

ジャイブとの生活が始まって翌日の事だった。僕に恐ろしい訃報が訪れた。

翌朝、僕が配達を終えてお昼寝をしていた時に携帯が鳴ったんだ。

『はい・・・もしもし。』

「ツ、ツナ君？あたしあたし！ユキだけど・・・」

『えええ・・・ゆ・・・ユキさん？！ど、ど、どうしたの？？』

驚いたよ。電話の主は津村由希さん。練からの紹介で昨日、三回目の飲み会をしたんだ。そして由希さんは結局、練の事が好きで・・・僕はまたフラれてしまったという・・・思い出したくもない話だ。しかしどうしたんだろう？！すごく慌てている。

『お、お、お、落ち着いてー！ど、ど、どうしたの？！』

「おめーも落ちつけてんだい、このブタ！」

ジャイブが横で余計な事を言うが僕は無視した。

「練が・・・昨日の帰りあたしをかばってトラックに撥ねられて・・・亡くなったの・・・。」

『え・・・練が・・・』



信じられなかった。

僕をいつもバカにしていたあの練が亡くなったなんて信じられるはずもなかった。

『わ、わかった！僕も・・・お葬式に行くよ！』

お通夜まで時間がない。慌てて喪服を着て葬儀会場に向かう僕はジャイブに声をかけた。

『ジャイブ！君はどうする？ついてくるのかい？』

「へっ！葬式なんて辛気くせーとこ行きたかねえんだけどな・・・」

「

ジャイブはプイとそっぽを向いた。

『じゃあ家で待っててよ。ゴハン置いとくから！』

僕が少し怒って言うと

「あああゝ！待った待った、わかったよ、行くってば！おまえだけ外食しようたってそうはいかねえぞっ！」

全く・・・この猫は僕より食い意地が張っているなあ・・・。

『練は早くに両親を亡くしてるからお葬式もきつと寂しいだろうな・・・かわいそうに・・・』

僕はそんなことを考えながら配達用カブに飛び乗った。

うちから葬儀場まではほんの15分ほどだった。祭壇の前、練は棺の中でまるで昼寝でもしているかのような顔で眠っていた。

『練……。』

練は確かにイヤなヤツだったけど日雇いのバイトで僕がハマして監督にぶたれた時、練がその監督を思いつきり殴ってKOしちゃって練までクビになっちゃったこととかそんなこともあった。ただのイヤなヤツじゃなかったよ。

「へへへっ！悔しかったら早くオレにおいついてみるよ！ココが違うんだよ、コ・コ・が！」

なぐんてイヤミったらしく言ってたあの練。眠る本人を目の前にして初めて「死」を感じた。

気が付くと棺の周りには恐らく練の彼女などであろう5、6人の女の子が練を見つめてビービー泣いていた。

なにせよ彼は僕なんかよりたくさんの人に愛されていたんだ。だって練はバンドでギターやってるしダンスうまいし顔はジャニーズ系だもん。そうだよねえ。

「全く……もう見てらんねーぜ。おい！ブタ！さっさと帰るぞ、いつまで泣いてんだ！！」

ジャイブが背中に背負ったりリュックから顔を出して僕の後頭部を引っ掻きながら小声でまくしたてる。

『いてっ！いてててっ！なんだよお・・・友達が亡くなったんだぞお？！』

「バカッ！こんな時だからこそあの由希ちゃんなんかチャ～ンスじやねーか！顔はカワイイしイイカラダしてるし・・・むっふっふっふ・・・」

まるでエロオヤジの如くにやけるジャイブ。

『・・・さいてーなエロ猫・・・。』

「うるせー！！さー早く引き上げるぞっ！帰ってメシだっ！さんまのかば焼きが食いたいぞっ！！」

『はいはい・・・わかったよう・・・。』

涙も拭わぬまま帰ろうとしたその時だった。

「ツナ君！！」

振り返るとそこには・・・・・・・・・・

『ゆ・・・由希さん？！どっどっどっどっどっしたの？！』

「バカッ！落ちつけ！」

ジャイブの声なんかもう僕の耳には入らない。

「もうあたし・・・どうしたらいいか・・・練がいなかったら・・・あたし・・・。」

『ゆ、ゆ、由希さん……。元気出そう？僕も……。ツライけど……。今日は……。練の傍にいてあげて？ぼ、ぼ、僕も……。朝刊の配達終わったら明け方に行くから……。』

「うん……。待ってるね……。」

後ろ髪を引かれる思いで僕は葬儀場を後にし、カブに乗ったんだ。

ブロロロロロ……。……。

ボロのカブはホントに遅い……。規定速度の30キロ以上が出ないんだよ、僕のカブ。

「おいおい……。あれでよかったのか……？」

ジャイブがサンマの骨を咥えながら僕に言う。

『だって……。由希さんはあれだけ練が好きなんだもん……。仕方ないよ……。』

「かあ……。……おまえの根性のなさにはほんとと感服するぜ！まったく！」

ジャイブはまるで呆れているようだ。

さあ・・・これから朝刊の配達です。僕だって練が亡くなってとても悲しい。でも僕がしっかりしなきゃ・・・。

### 3話：初めての指きりげんまん（前書き）

斎場に残してきた由希の元に急ぐツナ！はちゃめちゃんなトラブルもあるがジャイブの機転により救われる・・・。果たしてツナの運命は・・・???

### 3話：初めての指きりげんまん

大急ぎで朝刊配達を終わらせて部屋に戻った僕とジャイブ。早く斎場に行かなきゃ由希さんが待ってる。

「さあさあ急げ急げ！由希ちゃんが待ってるんだろ～～？？」

まるでお祭りの準備でもするかのようにはジャイブがまくしたてる。

『わかってるよ～～。でも少しでもマシな格好してかなきゃ・・・  
また由希さんに引かれちゃうじゃないか～～！』

「・・・こんな時にめかしこんで行くのも変だと思うぞ・・・」

ジャイブのぼやきを無視して僕はパンツからシャツからズボンまで買ったばかりの新しいものに着替え、リュックの中にジャイブを入れてカブにまたがった。

時間はまだ朝5時。車も少ないし走りやすい時間だった。ほどなくして僕らは葬儀場に着いた。

練の棺の前でもたれかかるように眠っていた由希さんを見つけた。

お化粧も落ちてすっかり目も腫れている。よっぽど泣いていたんだろっなあ。

「オマエ、気が利かないなあ～～。ほら、そこに膝かけ毛布が置いてあるじゃねえか！それをかけてやるんだよっ！」

リュックの中から顔を出したジャイブが僕にさっそく喝を入れる。

『わ、わ、わ、わかってるよお……』

僕は毛布を1枚取ってそっとかけてあげるんだけど……

『き、き、き、緊張で……手……手が震える……』

「バカバカっ！緊張するとこじゃねえだろっ！オマエそこで変なところ触ったりしたら文字通りブタ箱行きだぞっ！！」

ジャイブの言葉が僕をよりいっそう緊張させる。

『だ、だ、だ、だって……』

目の前で眠る由希さんの吐息が指に当たるんです。僕はもう緊張がピークに……。その時でした。

「きゃっ！ツナ君？！あなた何してるわけっ？！」

僕の手はしっかりと由希さんの胸元にぶつかっていた……。由希さんの表情はそれは恐ろしいものになってたんだ……

「こんな時に……変態っ！！」

……。ほらね……。もう練が亡くなってもこっぴつ役回りには変わらないんだ。

絶望しかけたその時だった。



「にゃん」

「え??」

リュックからジャイブが顔を出して事もあろうか由希さんに甘えるのです。

「やだ・・・このこつたらあ・・・。超カワイイ。慰めてくれるの? 優しいね。」

そしてジャイブが毛布に包まると由希さんがようやく気付いてくれたのです。

「もしかしてこの毛布・・・ツナ君が?」

『あ・・・いや・・・その・・・』

「なんだ・・・早く言ってくればよかったのに・・・。ごめんね。勘違いしちゃって・・・。ありがとう、ツナ君!」

由希さんの顔にちよつとだけだけど笑顔が戻ったんだ。

『いや・・・いいんだよ! きき気にしないで!』

ジャイブを見ると彼の目はこう言っていた。

「これでおお～～～きな貸し一つだぜ? むははははは～～!」

ジャイブの効果もあってか少し由希さんが明るくなった。告別式が

始まるまで僕らはいろんな話をしたんだ。

でもほとんどが練の話だったなあ。寂しいような仕方ないような・。  
あ、ジャイブの話はその次に多かったんだよ。でもさすがに人の言葉を喋る事は内緒にしたんだけどね。

「あたしもね、いろんな事情で両親と暮らしてなくてさ。ずっと一人で生きてきたの。誰にも頼らないで生きる自信があったけど・。  
あたしやつぱ弱くてね、そんな時にいてくれたのが練だったんだ。あの人は人のためなら自分の犠牲を厭わない人だったから・。」

『僕も一度ね、バイトでミスした時に監督にすごい殴られたんだ。そんな時に練は僕を助けてくれて・。監督さんをボコボコにしてバイトをクビになっちゃったりして・。熱いやつだった・。僕には絶対マネできないもん。』

「これからはあたしもツナ君も練に頼らずに生きてかなきゃならないんだもん・。お互いファイトだよ！はい！練の前で約束っ！」

『う・。・。うん・。・。』

「ゆゝびきゝりげゝんまんうゝそつゝいたゝらハリセンボンのーますっ！ゆびきつ・。・。た・。・。！」

指きりが終わったその時、由希さんはまた涙を流し始めた。やつぱり・。練は彼女の中で大きすぎる存在だったんだよね。

「貸し2つだかな・。・。」

ジャイブが僕の後ろでさり気無くぼやく。

そういうが早いかジャイブは涙を流す由希さんに甘えかった。

「きゃ・・・やだ・・・くすぐったいってば・・・あははは！」

由希さんはそんなジャイブのおかげでまた笑顔になってたんだ。それを  
見てちよつと複雑だったけど僕はジャイブに感謝した。そ

由希さんが笑顔なら・・・それでいいか・・・って思ったから。

#### 4話・僕、人生最大のピンチです。（前書き）

集金も順調。平凡な生活を繰り返すツナにまたしても好機！憧れの由希が自分の部屋に遊びに来ることに……。そんな由希を迎えに行くと女の悲鳴が……。いったい何が起こった？！

#### 4話・僕、人生最大のピンチです。

練の告別式も無事終わって僕はまたいつもの新聞配達に従事する生活に戻ったのです。

そして月末近くなるこの日、僕らにとって最も憂鬱な集金業務が始まるんです。

『よし！今日で残照（残り領収書枚数）を半分くらいにするぞつ！』

「じゃあ、2丁目の吉田さんところだ！あそこは集金の時にハムをくれるらしいぜ！」

『そーゆーとこばかり覚えてるんだな〜ジャイブは〜・・・』

配達カブに乗って数時間。僕は今日は頑張ったんだよ。100枚近くあった残照を残り10枚まで減らしたんだ。90件集金したんだよ。

さあ、今日は帰って大好物のハンバーグ弁当ライス大盛り＋ライス単品大盛りを食べよう・・・なんて考えていた時だった。

僕の住む部屋は新聞屋の2階。だから部屋に戻る時は1階のお店の前を必ず通るんだ。いつも通りにお店を通ると店長に呼び止められたんだ。

「おう！ブーちゃん！ちよいと、知ってつか？」

新聞屋の店長が声をかけてきた。

『あ・・店長。どうしたんですか?』

「最近このあたりに強盗が潜伏してるとかって噂が立ってるんだよ、警察からもポスターもらってよお、この顔見たらすぐ通報・・・。ってな! まあもうとつくに海外かどつかに高跳びしちまってるだろうけどな!」

恐ろしい話だ。まあ僕の部屋に盗るものなんてないんだろうけど。

『恐いですね・・・僕なんかすぐ刺されちゃいますよ・・・』

「おめえはそんだけ分厚い肉がありゃちよつとやそつと刺されても大丈夫だよ!」

ジャイブの悪態がまた始まった・・・。まあいいや・・とにかくお腹がすいたのでゴハンの準備だ。

『今日はゴハンがおいしいなあ・・・。仕事頑張った後のゴハンは最高だ!』

そんなときだった。

ピロリロピロリロ・・・。

「おい! ブタ! 電話鳴ってるぞ!」

『はい、もしも・・・ゆ、由希さん?!』

口に含んだゴハンの粒が全部吐き出てしまったんだ。

「うわわ・・・きつたねえっ！！このブタっ！吐くなよっ！」

突然の事でジャイブも避けられなかったようだった。

「ツナくうくん？終電逃しちゃってさあ・・・品川にいらんだけどツナくんち近かったよねえ？朝までお邪魔していいかしらあ・・・？」

いつもの由希さんと明らかに口調が違った。これは・・・まさか・・・しかもかなり酔っているようだった。

ゆ、ゆ、由希さんが部屋につっ？！ぼぼ僕の部屋につっ？！！

『は、は、は・・・はいっ！お、お、お、お待ち申しあげておりますっ！』

「不祥事起こした後の校長か、おまえは・・・。」

ジャイブがまたしてもハードにツッコミを入れた。

しかし嬉しいのもつかの間・・・この汚い部屋に由希さんをあがらせるわけにはいかない。

『かつっ・・・片づけなければあああああ！！！！！！！！』

そして30分後、品川駅で由希さんを待つ、僕とジャイブ。

『ああああ・・・今日は僕と由希さんにどんなドラマティックな展開が待ち受けているのだろう・・・』

「妄想はやめとけ・・・おまえの場合、あとで凹むから。」

そんなやり取りをジャイブとしていたそんな時だった。

「きゃ~~~~~!!」

『ひ、ひ、ひ、ひ、悲鳴だ・・・しかも女の人の・・・。』

ジャイブが表情を変えた。

「なにがあつたんだ?! よし! 試してみるぞ、ツナ!」

半ばジャイブについていく形で悲鳴のする方向へ僕は駆け出した。

『・・・何だか恐いなあ・・・』

そして見ると女の人が妙な男に背交い絞めにされ首には包丁が・・・。

その女の人は間違えようもない・・・由希さんだった・・・。

駆け付けた二人の警官は血を流してうずくまっていた。すごい血が出てたからきつと刺されたんじゃないだろうか・・・。

周りの人は蜘蛛の子を散らすように逃げていく。僕だけが取り残された。

「ツナ君! 助けて!!」



由希さんを羽交い絞めにしている男には見覚えがあった。

『ああああ・・・こいつはあの強盗・・・。』

そう、さつき店長に見せてもらったポスターの強盗だ。足が・・・震えるっ！怖い・・・死ぬほど怖い・・・。

「ツナ・・・刺される覚悟出来たか・・・？」

いつもチャラけているジャイブが真剣そうに言う。

『そ・・・そ・・・そんなわけないだろ・・・。』

当然だ・・・刺される覚悟なんてそうそう出来ないよ。

「んじゃあ由希ちゃん見殺すんかつ？」

ジャイブが僕を睨みつける。

『そんな・・・。』

そんな相談をしてる間に強盗は由希さんをしっかりと締めながら一歩一歩近づいてくる。

「くおらっ！そこどかんかいコラ！ー！」

強盗はもう僕のすぐ近くにまで迫ってきている。

『ひっつ・・・。』

僕はその殺気に押されて後ずさった。

「こんな時、練だったらどうすると思っつ？」

ジャイブの冷静な言葉に僕ははっとした。そうだ、ここでビビってたら由希さんはどうなっちゃうんだ！

僕はその刹那、覚悟を決めた。

『うわあああああ！！！！！！』

僕は無我夢中で包丁を握りしめた強盗に体当たりした。

## 5 話：入院と自白（前書き）

強盗から僕をかばって刺されたジャイブ。そしてついにジャイブの秘密が由希にバレてしまう。

## 5 話：入院と自白

強盗に向かって行く僕。まるで全てがスローモーションのようだった。

『ああ・・・マンガや映画なんかでよく言うスローモーションってこんなカンジなんだ・・・』

僕はこんな非常事態にそんな事を考えていた。僕と強盗の身体がぶつかるその刹那に僕が見たのは強盗の手に握られた包丁の切っ先。気づかないうちにその鋭利な刃物の先端は真っ直ぐに僕のお腹の方に向いていた。

「バカっ！そんな正面からぶつかったら・・・！！！！！！！！」

ジャイブが叫んだのがかすかに聞こえた。

僕と強盗がぶつかった。100キロある僕の身体にぶつかられてバランスを崩す強盗・・・そして僕のお腹に突き立った包丁。

「きゃあああああ！！！」

この悲鳴は由希さんだ・・・

ああ・・・僕はついに死んじゃうのか・・・。

そう考えた時だった。

『あれ・・・痛く・・・ない？』

そしてその包丁の突き立ったお腹を見つめるとそこには……。

『ジャ……ジャイブつつつ!!!!!!!!!!!!』

僕をかばってくれたんだ……。包丁はジャイブの前足の付け根あたりに深々と刺さっていた。

駆け付けた応援の警官に強盗は取り押さえられた。でも……でもジャイブが……。

『救急車……お願いです……!ジャイブを……ジャイブを助けて!!』

僕は警察の人たちに駆け寄り叫んだ。ジャイブは息も絶え絶えに言う。

「バカ……こんぐらいで死ぬかよ……。は……早く由希ちゃんとか……いつてやれよ……。」

『こんな時にまで……何言ってるんだよ!早く病院に……!!』

「こんな……ツバつけときゃ……治るってーの……。」

解放された由希さんが駆け寄ってきた。

「ツナ君大丈夫……??きゃっ!ジャイブ?!まさかさっきの強盗に……。」

『由希さん……ここで少しだけ待って……。ジャイブを病院に……』

。』

「気を付けて……。あたしはまだ警察の人とお話しなきゃいけないだろうから……。ここにいるね。」

僕はカブを飛ばした。うちの新聞屋の3件隣りにあった獣医さんのおうちに向かったんだ。

『ジャイブ……。死んじゃだめだ……。絶対だめだ……。』

「へっ……。だっ……。れが死ぬかい……。バカ……。言ってるじゃねえよ……。』

そうこうしてる間に獣医さんの家に着いた。

『お願いします！包丁で刺されたんです……。この猫を……。ジャイブを助けて下さい……。』

ジャイブは3日ほど獣医さんの所で入院することになった。幸いにも刺さった場所は急所を外れていて命にも別状はないし前足の切断とかそんな事もないって言うてくれたんだ。

「オレはいいから……。早く行けよ……。また……。フラれちまうぞ……。』

ジャイブはさつきとは打ってかわってまたいつもの悪態をつく。

『全く……。そんなに僕がいたらジャマなの？わかったよ……。』

人がこんなに心配してるのにジャイブのやつったら由希さんの事ばかりなんだもんなあ。助けてもらっておきながらこんな風に腹立てるのもおかしいけどさあ……。

僕は獣医さんにジャイブの事をよくお願いして駅前の由希さんの待つ場所に帰った。

ちょうど由希さんも事情聴取が終わる頃だったようでタイミングはよかったみたい。

『由希さん！おまたせ！』

「ジャイブは……大丈夫なの？」

由希さんが心配そうな顔をしながら僕に訊ねた。

『獣医さんのところに3日くらい入院することになったんだ。命にも前足にも別状はないみたいで……本当によかったよ……』

「そう……よかった……。それより……さっきジャイブが喋ったような……。戻れて……。気のせいだったのかな？」

そうだ……。さっき僕が強盗に飛びかかった時に……

『えええ……。ま、ま、ま、まさか……。だ、だ、だってジャイブは猫だよ？？ね、猫が喋るわけないよ！』

僕は慌ててフォローしたけど由希さんはもはや確信があったようだった。

「ツナ君．．．何か隠してないでしょうね？？」

由希さんの目がキラリと光る。

『か、か、隠してなんか．．．』

「本当に？？？」

ずっと詰め寄る由希さん。

『いや．．．その．．．』

一歩下がりがらしどころになる僕。

由希さんは尚も

「隠してるなら教えて？ね？？」

その気迫に僕はついに隠し通せなかった。ああ．．．

『ごめん．．．実は．．．かくかくしかじか．．．』

僕はあの日にブランコでジャイブと出会った話を洗いざらい全部喋ってしまっただ。

沈黙．．．．．世が全て飲み込まれたかのような僕と由希さんのこの沈黙．．．。

こんなことマジメに話したら普通の人だったら僕を狂人呼ばわりするだろう。そりゃそうだ、喋る猫なんて．．．。



「そんな事が・・・」

僕のアリンこよりも小さな根性を振り絞ったタツクルは・・・もはや喋る猫によって霞んで・・・否！もはや忘れ去られてしまったようです・・・。

「・・・あのね、今日はあたしの事助けてくれてありがとう。ツナ君、あの時はなかなかカッコよかった。」

え？僕の決死の自白は流された？！でも・・・よ・・・よかったあ・・・。僕・・・もう死んでもいいかも。

そして由希さんは僕の部屋に来る事になったんだ。ジャイブもないこの二人きりの空間・・・。ああ・・・緊張してきちゃった・・・。

## 6話：由希さん in my room（前書き）

ついにツナの部屋にやってきた由希。強盗事件のせいでロマンティックな雰囲気こそないが由希と一夜の時間いろいろな話をする・・・。

## 6話：由希さん in my room

沈黙……多分さつきよりもすごい沈黙……。

ついに由希さんが僕の部屋に来た。缶ジュースを二人で飲んでいるとこなんだ。

「ねえ、ツナ君？」

『は、は、は……はいっつ！』

「さつきの話なんだけど……ジャイブが喋る猫だつて話……。」

どうやらさつきの決死の自白はちゃんと届いていたようだった。

『あ……ああジャイブは……不思議な猫なんだ……』

「私も話してみたいなあ……」

『た、た、退院したら僕からジャイブに言ってみるよ。あいつも由希さんの事ばかり心配してて……あははは……』

そんな会話が続けていた。終電も終わって今は夜中の2時を過ぎようとしている。偶然か、僕は今日は配達が休みの日だったんだ。

「あたしね、練がいなくなつてすごく死にたい気持ちだったけど……ツナ君やジャイブが居てくれたおかげかな？ 少しずつ元気になってきてるみたいなの。このまま凹んでちゃダメなんだ、きつとそんな風に練が言ってくれてるのかなとかそんな風に考えながら自分を励

まして・・・」

『僕は・・・練の事どっちかって言えばキライだったんだ。僕にな  
い物をたくさん持ってたから嫉妬してただけかもしれないけど・・・  
本当は練がうらやましかつたのかも・・・』

なんでだろう・・・今までともに話せなかった僕が・・・思った事  
がずっと言葉になって喋れるようになった感じがしたんだ。

『それに・・・なんだか練がまだ僕たちの近くにいるようなカン  
ジがして・・・』

由希さんははつとした表情を一瞬した・・・のは気のせいだったん  
だろうか??

「ツナ君は真っ直ぐなんだね・・・あたしも練がまだ近くにいる気  
がしてるの。あの人、とてもお節焼きだったもんね。あ・・・ツ  
ナ君、ひとつお願いがあるんだけど・・・」

『お・・・お願い・・・???』

お願いって・・・なんだろう・・・僕の心臓は高鳴るばかり。

「あさつてジャイブの退院でしょ?その時に・・・またお邪魔して  
もいいかな?」

『もも・・・もちろん!こんな汚い部屋でよかつたら・・・』

また由希さんが来てくれる・・・僕は天にも昇る気分だった。だ  
んだん由希さんとの距離も近づいてる・・・もしかしたら・・・

もしかしたら・・・。

そんなこんなで気付くともう朝の5時を回っていた。

「あ・・・もうこんな時間・・・。じゃああたしはそろそろ・・・。今日  
はいろいろありがとう、ツナ君。」

由希さんは眩しいくらいの笑顔を残して帰っていった。

それからその日を寝て過ごした僕。そしてまた仕事・・・。

そして二日後。ついにジャイブの退院の日がやってきたんだ。

## 7話：ジャイブ復活パーティ（前書き）

ジャイブが戻ってくる日。ツナも由希も望んでいたこの日だった。ジャイブを迎えに行ったツナはジャイブに秘密がバレてしまったことを話す。そしてジャイブは・・・

## 7話：ジャイブ復活パーティ

そしてジャイブが帰ってくる日がやってきた。まだ数日しか経っていないのにこんなにジャイブのいない日がつまらないなんて・・・。

僕自身、まだ出会って間もない生意気に喋る猫のジャイブに対してとても強い友情を感じてるんだ。

朝10時。今日は第2週の月曜日だから朝刊はお休み。僕は睡眠をしっかりとって獣医さんの元を訪ねた。

「やあ、いらっしやい。ジャイブも君をずいぶん待ちわびていたよ。うだよ。」

獣医さんに抱きかかえられてジャイブは現れた。右前足の付け根にはしっかりと包帯が巻かれていた。

「もう退院しても大丈夫だけどジャイブはまだ自分の力では歩いたり出来ないからね。しばらくは家でも安静にさせてあげて。それからまだ出血があるようだったらうちに来て定期的にガーゼを変えなきゃだめだからね。」

『はい！ありがとうございます！』

僕はジャイブを受け取っていつもの通りリュックに入れた。あ、もちろん足のケガに気を付けてそ〜っとね。

由希さんは11時にうちに来るんだ。で、今は10時30分。そう、お茶菓子でも買いに行こうとスーパーへ向かった。

「おい・・・その・・・悪かったな・・・」

リュックの中からジャイブが言った。

『えっ？何がだい？』

「いや・・・オレが刺されたばかりに・・・高かったろう？金・・・」

『ジャイブが僕を守ってくれなかったら僕はどうなってたかわからないよ・・・。それにそんな事は言いっこなしさ！友達だろう？僕らは！』

「・・・すまねえ・・・。」

今日はやけに素直だなあ、ジャイブのヤツ。「当然だ！」とか言うと思ったのに・・・。

スーパーで買い物を買わせた僕。ちょうどいい時間に部屋に戻ってこれた。

『あ、そうだ・・・僕もジャイブに一つ謝らなきゃいけないことが・・・』

「ん？？」

『実は・・・ジャイブの事、由希さんにバレちゃって・・・。』

「・・・やっぱりか・・・。あん時喋っちまったからな・・・じゃあ



今日からは由希ちゃんとも普通に話すようにすつか！」

てつきり怒られると思ったのに……。やっぱり今日のジャイブは変に優しかった。

「こんにちはー！」

由希さんが来た！

『いらっしやい、由希さんー！』

「きゃー！ジャイブー！もう大丈夫なのー？？」

え……。僕思いつきしスルーされた？！

「あ……。あの……。どうも……。」

「ほ……。本当に喋るのね……。よろしくね、ジャイブ」

「あ……。ああ……。」

僕は完全に置いていかれてる……。しかしこのジャイブの様子はなんなんだろう……。

お菓子を食べて話も盛り上がったところで時計を見るともう2時。夕刊の配達の間だ。もう……。どうせなら夕刊も休みにしちゃえばいいのに……。仕方なく準備をして由希さんに声をかける。

『じゃあ僕、夕刊の配達に行ってくるね！』

「じゃあ、今日はあたしご飯作って待っててあげるっ！」

ゆ・・・由希さんの手料理・・・こ、これは夢じゃないだろうか・・・??

僕は胸に期待を100キロ以上膨らませてカブに乗った。

夕刊をいつもの倍以上のスピードで終わらせて部屋に戻るとなんだかとてもいい匂い・・・。

「おう！帰ったか！今日は由希ちゃん特製のポークカレーだ！共食いだな、おまえ。がっはっはっは！」

さつきとは打って変わってジャイブの悪態も絶好調だ。

「意外に早かったね。待っててね！もう少ししたら出来るからね！」

「今日はオレもカレーライスが食えるんだな！ちよい冷ましたヤツをネコ盛りで頼むぜ、由希ちゃん！」

「はいはい・・・そんなに慌てないのっ！」

ジャイブも待ちきれない様子だ。僕のお腹もすごく鳴っている・・・。ハズカシイけど・・・。

「はい、おまちどうさま！ツナ君すごく食べるでしょ？たっくさん作ったからいっぱい食べてね！」

「いったただっきまゝす！」

僕は大きな声で言った。

そして30分後……

「いや〜〜！うんまかったあ〜〜！ツナといるとサバ缶しか食えないからなあ……。胃に染みわたるうまさだったぜ！ごちそうさま、由希ちゃん！」

『ほんと！おいしかったよ〜！由希さんみたいな人がお嫁さんならきつと旦那さんになる人は幸せだろうなあ……。』

「ふふふっ……。ありがとう、二人とも」

僕、なんか最近幸せな事がたくさんだなあって思う。不謹慎かもしれないけど練が亡くなった日にジャイブと出会って……。こうして由希さんと仲良くなって……。

まるで練が死ぬ時に僕に幸運をくれたような……。でもそんなわけないよね、練はこんな僕の事をしっかりと友達なんて思ってたてくれないよ。「いたらただ面白いヤツ」ってだけだったんだろうな。こんな事考えるなんて不謹慎だぞ、僕……。

由希さんが僕に言った。

「ねえ、ツナ君。今度よかったらさ……。こないだ助けてくれたお礼って言うのもなんなんだけど……。ファンタジールランドでも一緒に行かない……。？？無料券を知り合いからもらったから……。」

ファンタジールランドっていうのは舞浜駅から少し歩いたところにあ

る老舗の遊園地だ。

『……ファンタジーランド？僕と？？い、いいのお？？』

「うん……もしツナ君がよかつたらでいいんだけど……」

『ぜ……ぜひ！～！』

「ひゃ～！もう目の前でいちゃつかないでくれよなあ～！」

ジャイブがそっぽ向きながらそんな事を言う。

「こおらっ！ジャイブっ！茶化さないのっ！」

「はいはい……おとなしくしてますよ～！」

そんなこんなで来月の19日……ひと月後に僕はついに女の子……しかもあの高根の花だった由希さんとファンタジーランドに行くことになったのです……。

## 8話：コーディネーター（前書き）

由希とデートの約束を取り付けたツナは今天にも昇る勢いだった。そしてそのデートの時に着ていく服を買いに行くため、友人のイケメン・祐に電話をする。そして買物に向かうのだが・・・

## 8話：コーディネーター

『新聞配達はもちろん強引に休みにしたし……。あとは……。身だしなみだな！』

由希さんと会う時はもちろん気合いを入れて穿き慣れないジーンズなんか穿いたりして少しでもオシャレに気を使っていたが……。

普段ともなると僕の格好は戸田競艇場で買ったオレンジのTシャツで後ろに「沫」と書かれているヤツ。ダボダボのとび職の人が穿いてるようなチノパン、カカトを踏みつぶした運動靴……と言ったカンジ。どんな女の子でも一緒に歩きたくない服装だろうなあ……。

「これを機におまえ服でも買いに行ったらどうだ？ 今ある服はもう捨てちまえよ！」

ジャイブはあくびをしながら言う。

そうだ、あれから3週間も経ったからジャイブの包帯はもうとれていて傷口もだいぶよくなっただよ。もう歩けるくらいまで回復したんだ。

『でも僕、センスないもん……。誰かコーディネートしてくれないと……。』

「友達でいるだろう？ うまくコーディネートしてくれるヤツさ！」

『そんなセンスのいいやついるわけ……。あっ！』

そう、いたのだ。そいつの名前は服部祐<sup>はっとりたすく</sup>。練に負けず劣らずのモテモテだったんだけど気取らない気さくなヤツで……。今はバイトしながら美容師を目指して専門学校に通ってるんだ。

早速、僕は祐に電話をしてみることにした。

『もしもし〜！祐？？僕だよ、ツナだよ〜！』

「おおお〜！ツナあ〜！ひ〜さし〜ぶりい〜！どしたの〜？」

『実は……。かくかくしかじかで……。』

「ん？わかった、いいよ〜！じゃあ明日世田谷のユニクロでねえ〜！」

うまく約束を取り付けた。祐のセンスにかかれれば僕も少しは見れるカンジになるにちがいない！

翌日……。夕刊の配達も終わって6時頃。ユニクロの前で待つ僕。ジャイブはまたまたリュックの中にいるんだけどね。

「おお〜！ツナ待ったか〜？？」

ゆったりとした口調のその声は間違いなく祐だった。顔はまるでSOPHIAのボーカルみたいな端正な顔立ちでそして足が長い……。見れば見るほど落ち込んでしまう。なぜ僕だけこんなふうに……。。

そしてユニクロで買い物始めた僕と祐。

「ツナさあゝ・・・これとか似合うんじゃない？あ、んでスポンはこんなカンジでさゝ！」

僕は頷くだけみたいになカンジ。そしてフィッティングルームに行こうとしたその時だった。

「あれ？ツナ君??？」

・・・・・・まさか？！

『あ・・・ゆゆゆ由希さん?!』

「ツナ君も買い物？奇遇だねえゝ！」

『ゆゆ・・・由希さんこの辺に住んでるの??』

「うち、ここの真裏に住んでるの！あら？そちらは？」

由希さんは祐に気が付く。

「あ・・・どおゝもおゝ！ツナの友達の祐です！ヨロシクゝ！」

「こちらこそゝ！すごい・・・祐さんてモデルさんみたい。足超ゝ長いし」

「いやいやいやゝ・・・んなことないっすよおゝ由希さんこそCAMのモデルさんみたいじゃんゝ！」

し・・・しまった・・・。このパターンはマズイ・・・。祐も今は彼



女いないし由希さんはこんなに美人・・・。

最悪の構想が頭に浮かびつつ焦る僕。

「じゃあ、友達待たせてるから行くね。またねツナ君、祐さん！」

『うん・・・また・・・！』

そして買物は続く。祐はさっきから由希さんの話ばかりだ。

「あの子カワイイよねえ・・・ツナ、狙ってるの？」

『うん・・・今日の買い物も来週、由希さんとディズニーランド行くからそのための買い物だったんだよ・・・』

「まあじかつ！まあほどほどに頑張れよ！オレそろそろ帰らなきゃさあ・・・じゃあねえ」

そんな話をしながら僕はユニクロで約4万円くらいの買い物をし、祐は帰っていった。

「やれやれ・・・厄介なヤツのハチ合わせになっちまったなあオイ。」

帰り道の途中、ジャイブがぼやく。

『え？どどういう意味さ？』

「おまえわかんねえのか？あいつ・・・祐は確実に由希ちゃん狙いにモードが決まってるのがよー！」

『えゝ！まさか！祐に限ってそんな人の好きな人をとったりなんか・  
・・』

「恋愛なんてのはしよせん弱肉強食だろ？由希ちゃんが祐に惚れたらおまえどうすんよ？？」

『それは・・・・まあ・・・・』

「あいつは練よりもやり手かもしんねえべ？おまえ大ピンチだろ！」  
言われてみればそうだった。祐は練と同等に女性に不自由しない人種だったんだ。確か前に練から聞いたこともあった。

『あああ・・・・なんか先が思いやられるなあ・・・・』

今日この日の祐と由希さんのばつたりの出会いが後の運命に大きな打撃を与える事を僕はまだこの時知るよしもなかったんだ。

## 9 話・夢の国と危険の始まり（前書き）

ついにデートの日を迎えた。舞浜駅に15分前に到着し、由希とのデートを想像し、悶々とするツナ。そしてそこにきたのは・・・

## 9 話：夢の国と危険の始まり

そして来た・・・運命の日。

服はバッチリ。ガラにもなくSAMUROIとかいう香水までつけて準備万端だ。今日はさすがに配達用のバイクは置いて・・・と。

遊園地にはジャイブは入れないので今日は留守番をお願いしてきたんだ。東京駅から京葉線に揺られる事20分。舞浜に着いた。時間は待ち合わせの15分前。

『あああ・・・緊張するよ・・・なんてたつて初のデートだもんなあ・・・』

緊張と盲想は膨らむばかり。そんなこんなで待ち合わせの5分前になった瞬間だった。

「お待ちどおさまっツナクン！」

ああっ・・・！！この声は由希さんだ！

白いワンピースの上に可愛らしい上着を羽織っている天使がそこにいた。しかし・・・

「ヤッホ～～ツナ～～！」

・・・その横にいたのは祐だった。

『ええっ！……祐？！なんでここに？？』

僕は驚きをまったく隠せなかった。

「いや……偶然だけさあ……今日オレもこっちに来る予定があつて……いや……偶然偶然！はっはっは！」

祐は勝ち誇つたような高笑いをする。

「さっき京葉線で会つたの。だからせつかくだし3人で楽しみましようつて事になったのよ。」

由希さんがご丁寧に解説してくれた。ああ……なんで僕の都合こつなるんだろう……。

由希さんも由希さんだよ……一人でファンタジーに来る予定なんか普通作らないだろう……祐の見え見えのウソがわかんないんだもんなあ……いや……もしかしたら由希さんはもう既に祐と……？

頭の中で嫌な想像がどんどん膨らんでいく僕。それをよそに仲良く歩く祐と由希さん。

『負けてたまるもんかつつ！！』

僕はそう気合を入れて二人の後を追つた。

「さて……どつからいこうかあ……？？」

祐はガイドマップを覗きながら言う。

「あたし、クマさんの見た夢」がいいなあ〜！」

『うわあ〜・・・乗り物こんなにたくさんあったつけえ？どれがいいかなあ・・・』

僕は小さい頃に家族で来て以来、ファンタジーランドには来ていなかったんだ。だからこそすごく気合が入っていたんだけど・・・。

「スプラッシュフォール！これファンタジーランドの定番っしょお〜！これ確か落ちる時写真撮ってもらえるんだよねえ〜！」

祐の目がキラキラと輝く。

「え〜！あたし落ちるの怖いよあ〜・・・」

「大丈夫だつて〜！手しっかり握ってるからさあ〜！」

『・・・』

ス・・・スプラッシュ・・・それを聞いた時僕は思わず黙り込んでしまった。そう、僕は絶叫系なるものが一切苦手なのだ。あの無重力感が・・・怖い。しかしここでビビったらもう祐とすさまじく差をつけられてしまう・・・僕は意を決した。

そして乗ったスプラッシュフォール。うう・・・まだあの落ちる所じゃないのに怖い・・・。

いきなりガタツて傾いたと思ったたら落ちるんだよね。そんなのが二回も続いて僕は失神寸前だった。

『あああ……もうだめだあ……』

カタカタカタ……と鳴るコンベアの音。

「お、お、お、落ちるの??もう3回目だけどほんとに落ちるの?」

さすがの由希さんも声がうわずっている。僕も2回の落ち所で頭はぼーっとしていた。

「だーいじょぶだーいじょぶー!」

なぜ祐はこんな平気そうな顔を……。なんて思った瞬間だった。ガクンとなった直後……

『わあああああああー!!!!!!!!!!』

体が浮く……。死ぬ……。僕は意識を失った。

ふと気がつくとベッドの上にいた。

『あわわわ……。僕はいつたい?!』

あわてて起き上がるとそこにいたのは救護員さん。

「スプラッシュフォールでビックリして気絶されたんですって? 気をつけなきゃだめですよ!無理して乗ったら危ないんですから

」！  
」

僕はどうやら落下のショックで気を失ったみたいだった。我ながら情けない……。

『由希さんと祐は……？？』

……いない……。僕が気絶してる間に二人は遊んでいるというのか？！

僕は慌てて救護室を出た。すかさず由希さんに電話する。しかし出ない……。嫌な予想が頭をぐるぐるする。早く二人を見つけなければ！！！時間はお昼12：25・

この時間ならどっかでお昼を食べてるに違いない！僕は片っ端からファンタジーランド内のレストランを探した。その途中だった。

「おお……ツナじゃん！」

祐がいた。よかった……。間に合った……。

『祐……あれ？由希さんは？？』

「なんかさ、親から急に電話が入ったとかで……。慌てて帰っちゃったんだよねえ」

由希さんは確か親とは住んでないはず……。でもそれを祐に知られるのもなんだか怖かったから僕は敢て知らないふりをしたんだ。

『えええ……なんかあったのかなあ……。』



「まあ・・・仕方無いっしょぉ・・・オレたちも帰ろうぜ、早いけど・・・。」

なんでだろう・・・。由希さん何かあったんだろうか・・・。

帰りの電車の中、由希さんの話を祐としていた。

「ツナ・・・由希さんオレに譲ってくんねえかな？」

祐がとてつもない事を言い出した。

『な、な、何を言うんだよ！ダメに決まってるじゃないか！』

当然だ。譲るわけないでしょ！！

「オレもマジになっちゃってんだよね、これでツナとの仲がこじれたりするのも嫌だしさあ。」

『僕だって祐は大事な友達だと思ってるけど・・・だからってすぐに由希さんをあきらめるなんて出来ないよ！』

「じゃあ、どっちがフラれても恨みつこナシにしようぜっ！」

『・・・うん。』

「じゃっオレは京浜東北線で帰るからさっ！じゃあなっ！」

彼は僕に挑戦状を叩きつけ東京駅で別れた。

そんなこんなで僕はテンションも急落して家に帰った。帰るとすぐにジャイブが僕に言う。

「えらく早いお帰りだな？いきなり手出してもうフラれたか？？くくく・・・」

『そんなんじゃないってば！由希さんの親御さんから電話がきたみたいで慌てて帰っちゃったんだよ、でもおかしいなあ。由希さんは親とは暮らしてないって聞いてただけど・・・』

「由希ちゃんの親・・・・・・・・まさか・・・。」

ジャイブはぼそつとそう言ったが今の僕には聞こえなかった。

そしてその翌日、今までにない波乱が僕を待っていたのだ。

## 10話：絶体絶命（前書き）

ファンタジーランドの後、様子のおかしかった由希。そんな由希から「もう会えない」というメールがツナに入る。事態を把握できないツナ。そんな中、ジャイブは由希の身の危険を察知していた。

## 10話：絶体絶命

そして翌日の夜だった。僕の携帯にメールが入った。

「いろいろごめんね。もうツナクンとは会えないかも・・・ほんとにごめんね。あたしに関わるときっとツナ君危ない目に遭っちゃうから。」

突然そんなメールが届いた。僕はその時すぐに思った。・・・まさか・・・まさか！

由希さんが祐とくつついた可能性が真つ先に頭に浮かんだ。そんな時にただならぬ雰囲気を感じたのかジャイブが近寄ってきた。

「おい・・・どうした？ブタ！」

『・・・・・・・・これ・・・・』

僕は携帯をジャイブに見せた。ジャイブは深刻そうに言った。

「オマエ、多分、祐と由希ちゃんがくつついたとかそんな心配してるんだろうけど・・・こりゃ祐がどうかという内容じゃねえと思うぞ・・・・。」

まるでジャイブは事態を理解しているような口ぶりだ。

『え・・・？じゃあいったいどういう・・・？?』

「昨今の様子を考えろよ！強盗から守ったりファンタジーランド

に誘われたり・・・嫌われる要素がねえだろ??」

ジャイブにしては珍しく肯定的な意見だ。でも僕のネガティブ思考は止まらない。

『でも現にこうしてメールがきてるじゃないかあ・・・』

「わかんねえけど裏つ返しに考えてみるよ、こりゃ由希ちゃんからのSOSだとも取れるとオレは思うけどな・・・。」

『そうだいいけど・・・とりあえず祐に電話してみるよ・・・』

僕は恐る恐る祐に電話をしてみる事にした。

「もしもし・・・ツナ?」

祐が電話に出ると同時に僕は聞いた。

『祐?! ねえ、キミんここに由希さんからメールこなかった??』

電話の向こうの祐はいつもと様子が違うようだった。

「ああ・・・実は今、由希さんと埠頭にいてさ。ちょっとマズイ事になったんだ」

ただならぬ雰囲気を感じて僕は祐に訊ねた。

『それってどういうこと・・・?? まさか・・・。今どこにいるの?』

「ツナ、いいか？オレにも由希さんにももう関わらない方がいい。もしオレになんかあったら警察に電話して埠頭にヤバイヤツらがいるって通報してくれ。いいか？オレみたいに・・・・・・・・・・」

唐突に電話が切れた。

いつもの祐じゃなかった。真に迫る緊張感に張りつめた声。これは何かあったに違いなかった。

『祐・・・・・・・・どうしたんだろう・・・・・・・・』

ジャイブは心配そうに僕に聞いた。

「なんだ？祐はなんて？」

『今、由希さんといるんだって・・・・・・・・それで・・・・・・・・祐も由希さんと同じ事言ってる・・・・・・・・』

ジャイブの表情が変わった。

「・・・・・・・・まさか・・・・・・・・おい、祐はどこにいるっつってた？！」

ジャイブが僕にすごい剣幕で言う。

『え？たしか埠頭って・・・・・・・・』

「さっさと行くぞ！祐と由希が危ない！！」

ジャイブはそう言うが早いかカブに向かって走り出した。

『な・・・なんで?!』

僕も慌てて後を追いなから訊ねた。

「説明はあとだ！早くカブ動かせ!!!!」

こんなすごい剣幕のジャイブは見た事なかった。そしてこの時、僕の中に大きな闇のような不安が渦巻いていたんだ。まるで・・・大切な何かが消えていってしまうようなそんな不安。

僕らはカブに飛び乗って品川埠頭を目指した。時刻は夜中0:00を回っていたんだ。

走るカブの途中、ジャイブは早口で事情を説明し始めた。

「あいつは一人だっておまえに言ってたけど・・・。あいつには親がいる。由希の親は・・・本職のヤクザの組長だ。今、ヤクザ同士の抗争で親さらいや子さらいで相手の組の動き封じるとかそういう汚いヤツらが増えてるって聞いた。おそらく由希は祐と二人でいたところをマークされてたんだろ。・・・急がないと・・・危ない・・・。」

『そそ・・・そんなヤクザがいつぱいいる中に僕ら二人で行ったってどうにもならないじゃないか・・・。』

もしそれが本当なら警察に任せた方がいいに決まってる。

「バカ！確かな証拠もないのに警察が動くわけねえだろ！オレたちでなんとかしねえとだめなんだ！」

『で……でも……』

決心のつかない僕にジャイブはキレたようだった。

「おまえも……惚れた女とダチのために死ぬ覚悟くらい出来るようになれよ！」

返す言葉がなかった。猫のジャイブにまで勇気のなさを問われた自分が情けなかったんだ。

『……』

「土壇場でビビって好きな女も友達も見捨てんのかよ……ならいい。オレ一人でもヤツらんとこ行く。こんな猫でもやるときやるんだぜ。」

決心する時なのかもしれない……今が自分を奮い立たせるその時なのかもしれない……。

『わかったよ……僕も行く……。怖いけど……行く！』

うちから品川埠頭まではすぐだった。海沿いを歩いていると……うずくまっている二人組がいた。その近くには倒れて気を失っているであろう黒服の男が二人。

由希さんと祐だった。祐はもう血と泥だらけだ。由希さんもボロボロだった。

「ツナクン……」 「ツナ……なんでここに……」



僕はとにかくここを離れなきゃって思ってたんだ。

『キミたちを助けにきたんだよ……。さあ、早く逃げよう！今から警察呼ぶから……。』

そう言った時だった。頭から足の先まで稲妻が走ったような衝撃を感じた。

僕はその衝撃に耐えかねて倒れ込んだ。どうやら角材で頭を殴られたらしかった。

僕の後ろでドスの利いた声が聞こえた。

「おう……。津村のお嬢さん。ナイト様二人に囲まれて逃げようってか？そうはいかねえよ。さ、きてもらうぜ」

痛くて立ち上がれなかった。頭から流れる汗……。手で拭ってみるとそれは血だった。もうだめだ……。

「ちつくしゅー！はなしやがれっ！くそっ！」

顔も痣と泥だらけの祐は暴れるがもはや抵抗になっていなかったようだった。痛さの合間にかろうじて顔を上げるとさっき倒れてた黒服と同じ服装の男が2人いて由希さんと祐を車に連れ込もうとしていたんだ。

その時だった。

「うわっ……。なんだこの猫は……。！」

ジャイブが祐を抑えてる男の顔に飛びついてた。その隙に祐はその男の腕を掴んで腕を廻した。関節がするするような音がする……。祐は合気道の技でその男の腕を折ったのだった。

「てめえら……。手荒いがもうここで死んでもらうとするか……」

僕の予想通りその男は懷からオートマチック拳銃を取り出して銃口を由希さんに向けた。

「そんなことして……。ただで済むと思ってるの……。???うちの組の人間が黙ってないわよ!!!!」

青ざめた顔で由希さんが叫んだ。やっぱり組の人間ってのは本当だったんだ……。しかしなんでジャイブはその事を知っていたんだろう。

「斉藤組の若頭の判断でなあ、殺ってもいいってことなんだ。悪く思ふなよ……」

拳銃から力チって音がする。その瞬間僕の身体は勝手に動いていた。由希さんの前に仁王立ちした僕にパンツという乾いた破裂音が聞こえたんだ……。

## 終話：後悔と生の価値（前書き）

撃たれたツナ。薄れゆく意識。そこに奇跡が起こる・・・。

## 終話：後悔と生の価値

僕はゆっくりと倒れていった。仰向けに倒れるその瞬間がすごくスローモーションでなんだか気持ちよかった。長い時間をかけて僕は地面に倒れ込んだ。

「ツナ？ウソだろう・・・おい・・・」

「ツナ君・・・あ・・・あたしのために・・・」

かすかに声が聞こえた。きつと由希さんと祐だ。

「くはははは！デブから死んだか！次は・・・」

恐らくヤクザが喋っていた最中だったんだろう。さっき僕が聞いた乾いた破裂音が響いた。

今度は誰が撃たれたんだろう。撃たれるのは僕だけでいいのに。

しばらくの沈黙の後に由希さんの声が聞こえた。

「パパ・・・どうしてここに・・・」

「すまんな由希。遅くなって・・・」

津村組の組長でもある由希さんのお父さんが来てくれたんだ。撃たれたのはそのヤクザで撃つたのは駆けつけてきた由希さんのお父さんのようだった。由希さんはっとして僕のところ駆け寄ってきてくれた。

「ツナ君……どうして……。練の事……。ようやく吹っ切れたと思ったのに……」

由希さんは涙を流してくれているようだった。けどその顔もぼやけてあまり見えなかった。

『いいんだよ……。由希さんは幸せになっていかなきゃ……。僕も……。きつと練もそれを望んでいるに違いないんだよ……』

そしてその後に祐の姿も僕のぼやけた視界に入ってきた。

「ツナ……。死ぬなよお……。死ぬんじゃねえよお！」

祐も泣いてくれる……。？でも由希さんと同じく顔がぼやけてもう見えなかった。

『いろいろ楽しかった……。ありがとうね……。祐……。由希さんのこと……。守ってあげて……。』

だんだん眠くなってきちゃった。どうやらお別れが近づいてるんだなって感じた。僕は最後の力を振り絞って由希さんの方に向き直った。

『由希さん……。ドジな僕だけど最後に由希さんを守れてよかった……。僕、由希さんの事がずっと好きでした。だから……。僕には出来なかった由希さんの幸せ……。必ず……。』

どうやら最後まで伝えられそうになかった。僕の意識はまるでチョコレートみたいに溶けていった。

「バカッ！……なんで死んじゃうのよ！あたしが……好きになってから死んじゃうなんて……」

最後に聞こえたその言葉が何より嬉しかった。意識をなくす直前・その瞬間だった。僕のすぐ横から一筋の光が立ち上ったんだ。その光の真ん中にいたのは……。

『ジャイブ……』

ジャイブの後ろに人影が映っていく……そして見覚えのあるその人は僕の消えかけた意識に語りかけてきた。

「ははは……やったな、ツナ。おまえは最後の最後で本物の愛情を手に入れたんだ……。由希を銃弾から守った姿、なかなかイケてたぜ！」

聞き覚えのある声だけど誰だか思い出せなかった。

『え……誰？』

「おいおい！友達の声も忘れたか？……オレだよ！練だよ！」

亡くなったはずだった練。そうだ、この声は確かに練だ。

「な……練?!」「うそだろ……」

彼の声はみんなにも聞こえるようだった。由希さんも祐も由希さんのお父さんも驚きが隠せない様子だった。でも僕にはなんとなくわかってたんだ。ジャイブの口調や口癖は練と似てた。非現実的すぎて確証はなかったけどほんとただなんとなく。

「オレが死んだ時、ひとつの未練があつた。おまえは性格悪いし顔も悪い、デブだしだらしないし・・・そんなおまえの結婚式に出るのがオレの楽しみだったんだよ。それがこの世への残留思念ってのか？そういう形で残ってオレの意識はこの猫に憑依させられたってわけだ。おまえが愛する人間と結ばれた瞬間にオレの意識はちゃんとあの世に行く・・・そういう取り決め付きだけだな！」

『僕は・・・キミが死んでよかったと思つた事さえあつたのに・・・どうして？』

練がいなかったから由希さんと頻繁に会う機会があつたのは事実だった。僕はきつと無意識的にでも練がいなくなつたのを喜んでいたのかもしれないのに。

「簡単な事だ。オレらはダチじゃねえか！」

練はそんな僕の意味には驚きもせず笑いながらそう言つたんだ。

『練・・・・・・・・』

そして練は二人にも語りかけ始めた。

「よお、祐！おまえの素行は相変わらずだったな・・・猫になつてからも見てたぜ！今回の由希獲得合戦は見事におまえの負けだな！はっはっは！」

そう言われた祐は照れたように笑つて言つた。

「・・・ははは・・・たしかにそうかもな・・・」

「でもな、ツナはこの通りダメなヤツだ！由希がいても多分こいつは人間的に変わらねえだろうさ、そんな時はおまえが相談に乗ってやってくれよ！」

「ああ・・・約束するよ」

そう言うとき練は由希さんに向き直った。

「由希！おまえはほんといい女だ！ツナみたいなブタにはもったいねえくらいだ！でも・・・おまえが惚れたあいつは間違いないぜ・・・その気持ち大切に・・・幸せになるんだぞ！」

由希さんはまだ練がいる事が信じられない様子だった。

「練・・・ほんとに・・・??ほんとに練なの・・・??」

「おっと！過去を振り返るのはナシだぜ！オレはもうここにいないんだ・・・残念だけだな。」

練はちょっと悲しそうに目を伏せた。

「あなたがいなくなつて・・・死にたかつた・・・でも今は・・・」

由希さんの言葉を遮って練は言った。

「わかつてる。おまえの心に想うそいつのためにもおまえはバカな事しちやいけない。」



「でも・・・そのツナクンも・・・」

「心配すんなよ・・・。ツナはオレが必ず救い出してやるから安心しな・・・。」

由希さんのお父さんもその様子が信じられないようだった。

「練君・・・君という男は・・・私はまるで幻を見ているようだ・・・」

そんな由希さんのお父さんに練は言った。

「久し振りだな・・・おやっさんよ、これでいいだろう？あいつならあんたの娘さん・・・きつと幸せになれるはずだぜ・・・。」

「・・・君が言うなら間違いないだろうな。私の娘のために・・・君にはすまないことをした。そして今度は綱渡君まで・・・」

「へっ！ガラじゃねーぜ・・・。安心しな！そのブタはしっかりたてき起こしてやるよ・・・」

そして練は両腕を広げて大声で言った。

「おまえらのために・・・1つだけ奇跡を起こしてやる！大事なものの、大切にしろよ！」

その瞬間、練の身体がまばゆいばかりに光ると僕の意識はまるで掃除機の中に吸い込まれたような感覚に陥った。

そして目が覚めると僕は空を見上げていたんだ。

『うつうつ……あれ？撃たれたところが……痛くない……』

殴られた頭も撃たれたお腹の傷も消えてなくなっていた。

「ツナ……君……」

由希さんが僕に抱きついて泣きじゃくる。僕は生き返ったの……？？

「これでもう大丈夫だ……みんな………じゃあな………」

練の身体は光と共に消えていった。そして光の中から解き放たれたジャイブはこっちを見て首をかしげていた。

僕は生前の練を好きじゃなかった。傲慢で女の子にモテモテで僕が好きな女の子は必ず練を好きになって。好きになれるわけがなかった。クライだったのかもしれない。でも……

練は死んでも尚、僕を助けてくれた。僕には何もない、ルックスも、知性も運動神経も社会性も！そんなダメな僕を二度までも命を賭けてまで救ってくれた練。

僕は最高の友達を軽視してしまっていたんだ。誰より僕の事を一生懸命に考えてくれていた一番大切にすべき友達を亡くしてしまったのに……僕はそれによって転がり込んできた一時の幸せを噛みしめて、友達の不幸を自分の幸にしてしまったんだ。

## エピソード

僕は由希さんと結ばれた。練が命を張ってくれたおかげで愛情ってものを手に入れる事が出来たんだ。

今僕は由希さんと結婚して幸せな毎日を送っている。新聞配達じゃとてもやってけないから僕は独立して小さな不動産屋さんの営業マンをやってるんだ。今は由希さんとジャイブと暮らしてます。

ジャイブはもう喋らなくなっただけど僕や由希さんと仲良くしてくれる。もしかしたらこいつは元々、練みたいな猫だったのかもしれないな、あははは・・・。

でもね、僕が最後に手に入れた大事なものは愛情だけじゃなかった。永遠に消えない友達との絆。練の思い。

僕は今までずっと世間や周りの人たちに対して劣等感を持って生きてきていたんだ。僕は一人、僕には何も無い。僕は何も出来ない・・・。そう思ってた。でもそうじゃなかった。

僕にはジャイブ・・・練がいた、祐がいた。そして由希さんがいたんだ。僕は目の前にいた大事な人たちを見て見ぬふりしていたんだ。そんな僕が手に入れたモノ。それは変わらぬ友情、そして愛情だった。

みなさんに親友はいますか？

みなさんに大事な人はいますか？

いないって思ってる人、きっとそれは僕と同じだと思う。人は生きてる限り自分を心配し、思ってくれる人が必ずいます。

気付けばその人を無碍に扱っちゃったり傷つけちゃったり、生きてく以上そんな事はたくさんあるだろうけど・・・。

僕は僕の大切な人をこれから大切にしていきたいって思います。

孤独を感じた時、死にたくなった時は少しだけ考えてみてください。あなたが思う人が必ずいるって。そしてその人はあなたがいるだけで救われているんだって。

あわわ・・・なんだか最後は御説教みたいになっちゃったけどこれがダメダメな僕が大事な人からもらった大切な物のストーリーです。  
あなたとあなたの大事な人がこれからも幸せでありますように・・・。

） e n d ）

このお話はフィクションです。登場人物は架空の人物です。

許可なく無断転載・転用を禁じます。

## エピソード（後書き）

いかがでしたでしょうか？おざなりなストーリーですが読んでいただいて感じた事、叱咤激励などいただければ嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9207d/>

---

モテない男が手にした物

2010年10月20日14時42分発行